

尾生の信

芥川龍之介



尾生は橋の下に佇んで、さつきから女の来るのを待っている。

見上げると、高い石の橋欄には、蔦蘿が半ば這いかかつて、時々その間を通りすぎる往来の人の白衣の裾が、鮮かな入日に照らされながら、悠々と風に吹かれて行く。が、女は未だに来ない。

尾生はそつと口笛を鳴しながら、気軽く橋の下の洲を見渡した。

橋の下の黄泥の洲は、二坪ばかりの広さを剩して、すぐに水と続いている。水際の蘆の間には、大方蟹の棲家であろう、いくつも円い穴があつて、そこへ波が当る度に、たぶりと云うかすかな音が聞えた。が、女は未だに来ない。

尾生はやや待遠しそうに水際まで歩を移して、舟一艘通らない静な川筋を眺めまわした。

川筋には青い蘆が、隙間もなくひしひしと生えている。のみならずその蘆の間には、所々に川楊が、こんもりと円く茂っている。だからその間を縫う水の面も、川幅の割には広く見えない。ただ、帯ほどの澄んだ水が、雲母のような雲の影をたつた一つ

鍍金しながら、ひっそりと蘆の中にうねっている。が、女は未だに来ない。

尾生は水際から歩をめぐらせて、今度は広くもないう洲の上を、あちらこちらと歩きながら、おもむろに暮色を加えて行く、あたりの静かさに耳を傾けた。

橋の上にはしばらくの間、行人の跡を絶たないのであろう。杳の音も、蹄の音も、あるいはまた車の音も、そこからはもう聞えて来ない。風の音、蘆の音、水の音、——それからどこかでけたたましく、蒼鷺の啼く声があった。と思つて立止ると、いつか潮がさし出したと見えて、黄泥を洗う水の色が、さつきよりは間近に光っている。が、女は未だに来ない。

尾生は険しく眉をひそめながら、橋の下のうす暗い洲を、いよいよ足早に歩き始めた。その内に川の水は、一寸ずつ、一尺ずつ、次第に洲の上へ上つて来る。同時にまた川から立昇る藻の匀や水の匀も、冷たく肌にまつわり出した。見上げると、もう橋の上には鮮かな入日の光が消えて、ただ、石の橋欄ばかりが、ほのかに青んだ暮方の空を、黒々と正しく

切り抜いている。が、女は未だに來ない。

尾生はどうとう立ちすくんだ。

川の水はもう沓を濡しながら、鋼鉄よりも冷やかな光を湛えて、漫々と橋の下に広がっている。すると、膝も、腹も、胸も、恐らくは頃刻を出ない内に、この酷薄な満潮の水に隠されてしまうのに相違あるまい。いや、そう云う内にも水嵩は益高くなつて、今ではどうとう両脛さえも、川波の下に没してしまつた。が、女は未だに來ない。

尾生は水の中に立つたまま、まだ一縷の望を便りに、何度も橋の空へ眼をやつた。

腹を浸した水の上には、とうに蒼茫たる暮色が立ち罩めて、遠近に茂つた蘆や柳も、寂しい葉ずれの音ばかりを、ぼんやりした霧の中から送つて來る。と、尾生の鼻を掠めて、鱸らしい魚が一匹、ひらりと白い腹を翻した。その魚の躍つた空にも、疎ながらもう星の光が見えて、葛羅のからだ橋欄の形さえ、いち早い宵暗の中に紛れている。が、女は未だに來ない。……

夜半、月の光が一川の蘆と柳とに溢れた時、川の水と微風とは静に嘔き交しながら、橋の下の尾生の死骸を、やさしく海の方へ運んで行つた。が、尾生の魂は、寂しい天心の月の光に、思い憧れたせいかも知れない。ひそかに死骸を抜け出すと、ほのかに明るんだ空の向うへ、まるで水の勻や藻の勻が音もなく川から立ち昇るように、うらうらと高く昇つてしまつた。……

それから幾千年かを隔てた後、この魂は無数の流転を閲して、また生を人間に託さなければならなくなつた。それがこう云う私に宿っている魂なのである。だから私は現代に生れはしたが、何一つ意味のある仕事が出来ない。昼も夜も漫然と夢みがちな生活を送りながら、ただ、何か來るべき不可思議なものばかりを待つている。ちようどあの尾生が薄暮の橋の下で、永久に來ない恋人をいつまでも待ち暮したように。

(大正八年十二月)

底本：「芥川龍之介全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和 61）年 12 月 1 日第 1 刷発行

1996（平成 8）年 4 月 1 日第 8 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 3 月～1971（昭和 46）年 11 月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998 年 12 月 8 日公開

2004 年 3 月 7 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。